

多言語オペラ『女船客』《The Passenger》』上映会

報告 久野量一

ポーランドで一九二三年に生まれたゾフィア・ポスムイシは
ホロコースト・サヴァイヴァーである。二十歳にならないうち
にゲシュタポに捕らえられて強制収容所に送られたが生還し
た。ワルシャワ大学で学び、収容所体験をまずはラジオ・ドラ
マとして完成させ、その後自身の手でノベライズした。それが
一九六二年刊行の小説『パサジェルカ』で、日本語でも読むこ
とができる（『パサジェルカ（女船客）』佐藤清郎訳、恒文社）。こ
の作品に基づいて映画監督アンジェイ・ムンクは映画化を進め
ていたが、撮影中の事故で亡くなったため完成させることはで
きなかった。とはいえその未完の映画はDVDで鑑賞可能であ
る（日本公開は一九六四年）。

さらに話は続き、ポスムイシの原作は、ポーランド出身にし
てソ連で活躍した作曲家ミェチスワフ・ヴァインベルクによつ
てオペラ化された。それが一九六八年のことである。ところが
初演されたのは作曲家の死後、二〇〇六年だという。

このたび研究所の企画として上映されたのは、幾多のアダ
プテーションの遍歴の果てに上演されたそのポスムイシ原作、
ヴァインベルク作曲、台本はメドヴェージェフによるオペラで
ある（メドヴェージェフはヴァインベルクと組んで別のオペラも作つ
ている）。セリフは四割がドイツ語、四割がロシア語、残りは

イディッシュ語、ポーランド語、フランス語、英語というわけ
で、多言語オペラと銘打った。字幕は英語版である。

ストーリーは、収容所の元看守だったリーザが夫と南米ブラ
ジルへ豪華船旅に出たところ、船客に元収容所囚人のマルタ（と
思われる人物）を発見し、収容所の過去がよみがえってしまう
というものだ。リーザの優雅な旅の日常は壊れるしかない。加
害者と被害者の偶発的な遭遇による「悪夢のよみがえり」は、
例えば南米ではチリのアリエル・ドルフマン原作の『死と乙女』
がある（ロマン・ポランスキーの手で映画化された）。

上映会には本企画の提案者である西成彦さん（立命館大学）
が解説者として上京してくださった。「ホロコースト経験者／
ホロコースト作家の言語遍歴」と題し、収容所を多言語空間と
してみる話は示唆に富むものだった。資料としてオペラ台本を
多言語（フランス語、ドイツ語、英語版）で用意した。このオペ
ラ目当てに遠方から来てくださった方、ヴァインベルクが好き
でと言って観に来られた方もいた。水曜日の午後、三時間に渡
る上映とその後の解説、質疑は充実し、話は終わらず懇親会へ
と流れ込んでいったのである。

日時：二〇一九年十一月六日（水）十四時―十八時
場所：東京外国語大学 事務管理棟二階 大会議室

